

H-1

日本語における例外的格付与構文と複合名詞句内に含まれた照応形への束縛に関する研究
田儀勇樹（大阪大学大学院）
yuki.tagi@outlook.com

1 はじめに

目的: 本発表では、日本語の例外的格付与構文 (以下 ECM) と複合名詞句内に位置する照応形束縛について議論する。ECM 構文については Hiraiwa (2001, 2005) の「対格主語の主節への上昇は随意的である。」という説を採用し、議論を進める。その上で、Hiraiwa (2001, 2005) で議論されている、対格主語が埋め込み節に留まっている環境での複合名詞句に含まれた照応形への束縛現象をもとに、日本語の埋め込み節の主語がガ格の時と、ヲ格の時とでは差異が生ずることを主張する。

2 日本語における ECM 構文

- 本節では、(1) に挙げた、日本語の ECM 構文*¹ と、その先行研究である、Hiraiwa (2001, 2005) を概観する。

(1) 太郎は花子を馬鹿だと思っている。

2.1 随意的上昇: Hiraiwa (2001, 2005)

- Hiraiwa (2001, 2005) は、日本語の ECM で対格主語が、主節へ上昇せず、埋め込み節に留まる現象もあることから、対格主語の主節への上昇は随意的であると主張している。

- (2) a. ジョンがまだメリーが/を子供だと思った。
b. ジョンが [_{CP} メリーが/を その仕事に向いてないと] 思った。
c. ジョンが [_{CP} その仕事に _i メリーが/を _{t_i} 向いてないと] 思った。 (Hiraiwa 2001:72)
- (3) a. 彼らは全員太郎 (のこ) を 馬鹿だとも思わなかった。
b. 彼らは太郎 (のこ) を 全員馬鹿だとも思わなかった。
c. 彼らは全員誰 (のこ) を 馬鹿だとも思わなかった。
d. *彼らは誰 (のこ) を _i 全員 _{t_i} 馬鹿だとも思わなかった。 (Hiraiwa 2005:165)

*¹ 日本語の ECM の分析については、Hiraiwa (2001, 2005) での分析に対し、Kuno (1976), Sakai (1996), Tanaka (2002) 等による、「日本語の ECM 主語は主節に上昇する。」という分析も提案されている。Kuno (1976) 等は、上記の分析を支持する代表的な事例として、副詞の位置 (1) や、数量詞上昇 (2) を挙げている。

- (1) a. 山田は田中を愚かにも馬鹿だと思っていた。
b. *山田は田中が愚かにも馬鹿だと思っていた。 (Kuno 1976:25)
- また、数量詞上昇において、ガ格の主語では曖昧性が無い一方、ヲ格では曖昧性が生ずる。(Kuno 1976:28)
- (2) a. 誰かが皆を馬鹿だと思っている。 (誰か > 皆, 皆 > 誰か)
b. 誰かが皆が馬鹿だと思っている。 (誰か > 皆, *皆 > 誰か)
- しかしながら、本研究では Hiraiwa (2001, 2005) で議論されている、日本語の ECM 主語が埋め込み節に残っている環境下での束縛現象を考察するため、(1) や (2) のような主節に上昇している現象については本発表では議論の対象としない。

- (4) a. 太郎は愚かにも誰(の)を馬鹿だとも思わなかった。
 b. *太郎は誰(の)を_i 愚かにも_i 馬鹿だとも思わなかった。 (ibid)

Hiraiwa (2005) は否定極性表現である、「誰」は「も」によって C 統御されなければならないとし、(3d) と (4b) が非文であるのは、この否定極性表現が、主節に上昇したことにより、「も」が否定極性表現を C 統御できなくなったからであると主張した。

- 本節では、以下の内容について議論した。
 - 埋め込み節を修飾する副詞句や、埋め込み節の述部に対格主語が後続することができることから、対格主語の主節への上昇は強制的ではない。(Hiraiwa 2001)
 - 否定極性表現が「も」によって C 統御されなければならないことから、対格主語は埋め込み節に留まることもできる。(Hiraiwa 2005)

3 照応形束縛と ECM

- 日本語においてガ格を付与された埋め込み節の主語は主節の主語から束縛を受けることができる。(Nishigauchi 1992)。

- (5) ジョンとメリーが [お互いがピルを責めたと] 思った (こと)。 (Nishigauchi 1992:159)

- 埋め込み節の主語は ECM 主語であれ、ガ格主語であれ主節の主語から束縛を受けることができる。

- (6) a. 太郎と花子は_i お互いが_i 馬鹿だと思った。
 b. 太郎と花子は_i お互いを_i 馬鹿だと思った。

→ Nishigauchi (1992) での指摘と、ECM 主語の振る舞いより、照応形束縛において、日本語の埋め込み節の主語はガ格であってもヲ格であっても差異はないということが予測される。

3.1 照応形束縛と複合名詞句

- 本節では、主節の主語から複合名詞句*2に含まれた照応形への束縛において、ガ格での場合と、ヲ格での場合において差異が生ずることを主張する。

- (7) a. 太郎と花子は_i お互いが_i 批判した誰を 賢いとも思わなかった。
 b. *?? 太郎と花子は_i お互いが_i 批判した誰が_i 賢いとも思わなかった。
- (8) a. 太郎と花子は_i まだ お互いが_i 雇った新入社員を 未熟だと思った。
 b. *?? 太郎と花子は_i まだ お互いが_i 雇った新入社員が_i 未熟だと思った。
- (9) a. 太郎と花子は_i その仕事に お互いが_i 雇った新入社員を 向いていないと思った。
 b. *?? 太郎と花子は_i その仕事に お互いが_i 雇った新入社員が_i 向いていないと思った。

- ただし、複合名詞句に照応形が含まれない場合、ガ格、ヲ格を問わず、埋め込み節の主語の位置に生じ得る。

*2 本発表では、複合名詞句の構造を Murasugi (2000) に従い、日本語の複合名詞句は CP を取らず、直接 TP を取るものと仮定し、議論を進める。詳細な議論については、Murasugi (2000) を参照されたい。

- (10) a. 太郎は花子が批判した誰を馬鹿だとも思わなかった。
 b. 太郎は花子が批判した誰が馬鹿だとも思わなかった。
- (11) a. 太郎はまだ花子が雇った新入社員を未熟だと思った。
 b. 太郎はまだ花子が雇った新入社員が未熟だと思った。
- (12) a. 太郎はその仕事に花子が雇った新入社員を向いてないと思った。
 b. 太郎はその仕事に花子が雇った新入社員が向いてないと思った。

4 分析と他の構文への応用

- 本節では、(6a) と、ガ格を伴った複合名詞句とを比較し、(14) を仮定することにより、3.1 で指摘した問題点の解決を図る。また、(14) の正当性は間接疑問文、ガノ交替においても有用であることを主張した上で、この仮説の妥当性を主張する。
- (6a) と (8) を (13) で再掲し、これら 2 文を比較検討する。

- (13) a. 太郎と花子は_i お互いが_i 馬鹿だと思った。
 b. *?? 太郎と花子は_i まだ お互いが_i 雇った新入社員が 未熟だと思った。

(13) で、(13a) は、ガ格の主語が埋め込み節の主語の 1 つだけである一方、(13b) ではガ格の主語が、埋め込み節の主語と、複合名詞句内の 2 つあることが確認できる。

- (13) での考察をもとに、(14) を提案する。

- (14) 照応形束縛 (日本語):
 先行詞はガ格を付与する TP を 2 つ以上を超えて照応形を束縛することはできない。

- (14) は、複合名詞句が他動詞の目的語として生じた場合、その中の照応形が主語によって束縛されることから支持される。

- (15) a. 太郎と花子はお互いが買った本を読んだ。
 b. 太郎と花子は_i [_{vP} [_{DP} [_{TP} お互いが_i 買った] 本を] 読んだ。]

- (14) を (6) や、複合名詞句を伴った文に適用すると、以下のように分析される。(6a) は、(16) に、(6b) は、(17) に、(18) と (19) は、(8) を再掲している。

- (16) ガ格照応形
 a. 太郎と花子は_i お互いが_i 馬鹿だと思った。
 b. 太郎と花子は [_{vP} [_{CP} [TP-ga] [_{DP} お互いが_i] T] C] v]

- (17) ヲ格照応形
 a. 太郎と花子は_i お互いを_i 馬鹿だと思った。
 b. 太郎と花子は [_{vP} [_{CP} [TP] [_{DP} お互いを] T] C] v]

(18) 複合名詞句 (ヲ格)

- a. 太郎と花子は_i まだお互いが_i 雇った新入社員を未熟だと思った。
b. 太郎と花子は [_{vP} [_{CP} [_{TP} まだ [_{DP} [_{TP} お互いが雇った] 新入社員を] 未熟だ T] C] v]

(19) 複合名詞句 (ガ格)

- a. * 太郎と花子は_i まだお互いが_i 雇った新入社員が未熟だと思った。
b. 太郎と花子は [_{vP} [_{CP} [_{TP-ga} [_{DP} [_{TP-ga} お互いが雇った T] 新入社員が] 未熟だ T] C] v]

4.1 間接疑問文

- 日本語の間接疑問文では、埋め込み節の主語がガ格であることが要求されている。(Takeuchi 2010)

- (20) a. 太郎は [_{CP} [_{TP} 花子が馬鹿] か] 訊ねた。
b. * 太郎は [_{CP} 花子を [_{TP} 馬鹿] か] 訊ねた。 (Takeuchi 2010:115)

- (Takeuchi 2010) での指摘と、(14) の仮説から、照応形を含んだ複合名詞句が間接疑問文の主語として生じた場合、主節の主語が複合名詞句内の主語を束縛できないことを正しく予測する。

- (21) a. 太郎は花子が雇った新入社員が賢いか訊ねた。
b. *?? 太郎と花子は_i お互いが_i 雇った新入社員が賢いか訊ねた。

- (21b) の構造は以下のようになる。

- (22) 太郎と花子は [_{vP} [_{CP} [_{TP-ga} [_{DP} [_{TP-ga} お互いが雇った T] 新入社員が] 賢い T] C] v]

4.2 ガノ交替

日本語の複合名詞句において、名詞句を修飾する節の主語はガ格とヲ格を認可する。(Shibatani 1975, Nakai 1980, Saito 1983, Miyagawa 1993, Watanabe 1996, Ochi 2001, 2004 等)。

- (23) a. 太郎が買った本。
b. 太郎の買った本。 (Ochi 2004:62)

- Ochi (2004) *³によれば、ノ格の主語は D によって認可されるとし、(23b) の構造として、(24)*⁴を挙げている。

- (24) [D [_{TP} ... [_{vP} e [_{vP} SU [v [_{vP} ...]]]]]]

(Ochi 2004:65)

- 以上を踏まえると、複合名詞句内の照応形主語がノ格であれば、主節の主語から束縛が可能になることが予測されるが、その予測も正しく導き出される。

- (25) a. ??* 太郎と花子は_i まだお互いが_i 雇った新入社員が未熟だと思った。
b. (?) 太郎と花子は_i まだお互いの_i 雇った新入社員が未熟だと思った。

³ Ochi (2004) は、Murasugi (1991) に従い、日本語の複合名詞句は直接 TP を取ると主張している。

⁴ Ochi (2004) は、ノ格主語が DP 指定部まで上昇する分析と、vP 指定部に留まる分析 (Miyagawa 1993, Watanabe 1996) について議論している。本発表では、Miyagawa (1993), Watanabe (1996) に従い、ノ格主語が vP に留まる分析を採用する。

- (25b) に (24) を適用すると以下ようになる。

(26) 太郎と花子は [_{VP} [_{CP} [_{TP-ga} まだ [_{DP-no} [_{TP} [_{VP} お互いの雇った] T] 新入社員が] 未熟だ T] C] v]

- 以上の議論により、日本語の照応形束縛において、ガ格の照応形主語と、ガ格の複合名詞句内での照応形の振る舞いを比較検討することにより、照応形の先行詞が2つのガ格を付与するTPを超えて束縛できないという仮説を示し、照応形束縛の観点から、ガ格主語とヲ格主語とでは差異が生ずることを示した。また本節で提案した仮説は間接疑問文やガノ交替においても、有用であるということを示した。

5 結語

- 本発表では、Hiraiwa (2001, 2005) での「日本語の ECM 主語の主節への上昇は随意的である。」という主張に従い、日本語の ECM 主語が埋め込み節に留まっている環境下で、照応形を含んだ複合名詞句の束縛現象をガ格と比較することによりガ格の主語とヲ格の主語では照応形束縛の振る舞いにおいて差異が生ずることを主張した。これらの差異を説明すべく、(14) を提案し、(14) が他動詞の目的語として複合名詞句が生じた場合や、間接疑問文の主語として生じた場合、ガノ交替において有効であることを主張した。

参考文献

- Hiraiwa, Ken. 2001. Multiple Agree and the Defective Intervention Constraint in Japanese. *MIT Working Papers in Linguistics* 40:67–80.
- Hiraiwa, Ken. 2005. Dimensions of Symmetry in Syntax: Agreement and Clausal Architecture. Doctoral Dissertation, Massachusetts Institute of Technology.
- Kuno, Susumu. 1976. Subject Raising. In *Japanese Generative Grammar*, ed. Masayoshi Shinatani, volume 5 of *Syntax and Semantics*, 17–49. New York: Academic Press.
- Miyagawa, Shigeru. 1993. Case-Checking and Minimal Link Condition. *MIT Working Papers in Linguistics* 19:213–254.
- Murasugi, Keiko. 1991. Noun Phrases in Japanese and English: A Study in Syntax, Learnability and Acquisition. Doctoral Dissertation, University of Connecticut.
- Murasugi, Keiko. 2000. Japanese Complex Noun and the Antisymmetry Theory. In *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, 211–234. MIT Press.
- Nakai, Satoru. 1980. A Reconsideration of Ga-No Conversion in Japanese. *Papers in Linguistics* 13:279–320.
- Nishigauchi, Taisuke. 1992. Syntax of Reciprocals in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 1:157–196.
- Ochi, Masao. 2001. Move F and Ga/No Conversion in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 10:247–286.
- Ochi, Masao. 2004. Ga-No Conversion and Overt Object Shift in Japanese. *Nanzan Linguistics 2: Research and Activities* 61–80.
- Saito, Mamoru. 1983. Case and Government in Japanese. In *Proceedings of the Second West Coast Conference on Formal Linguistics*, 257–259. Stanford: CSLI.
- Sakai, Hiromu. 1996. Clause Reduction in Japanese. *MIT Working Papers in Linguistics* 29:193–212.
- Shibatani, Masayoshi. 1975. Perceptual Strategies and the Phenomena of Particle Conversion in Japanese. In *Papers from the Parasession on Functionalism*, ed. Robin E. Grossman, L. James San, and Timothy J. Vance, 469–480. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Takeuchi, Hajime. 2010. Exceptional Case Marking in Japanese and Optional Feature Transmission. *Nanzan Linguistics* 6:101–128.

Tanaka, Hidekazu. 2002. Raising to Object out of CP. *Linguistic Inquiry* 33:637–652.

Watanabe, Akira. 1996. Nominative-Genitive Conversion and Agreement in Japanese: A Cross-Linguistic Perspective. *Journal of East Asian Linguistics* 5:373–410.